

日本海沿岸地域における土井ヶ浜遺跡出土鉄製品の意義

村上 恭通*

はじめに

弥生時代の日本海沿岸地域では舶載あるいは九州系鉄製品が豊富であり、その点で瀬戸内側とは対照的である。鳥取県妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡、石川県八日市地方遺跡などの出土品がその理解を助けている。しかしながら、沿岸地域を西に進むほどにその豊富さは影を潜め、山口県の響灘沿岸地域にいたると弥生時代の鉄製品を議論するための資料は皆無に等しい状況であった。

この現状に大きな影響を与えるのが、本稿で取りあげる土井ヶ浜遺跡の出土品である。弥生人骨の発掘調査と研究で著名な土井ヶ浜遺跡は下関市豊北町にあり、1953年に実施された第1次調査以降、鉄製品が出土しており、それらの概要については第12次調査までの成果を収めた報告書のなかで触れられている〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編2014〕。これらについて詳細に報告されなかったのは、厚い砂礫や赤錆に覆われていたり、経年変化で旧状をとどめていなかったためである。

このたび機会を得て、第1次調査以降に出土した鉄製品について調査を実施した。総数28点のうち、1点は古代・中世の雁又鎌であり、それを除く27点が弥生時代の鉄製品とされる。そのうち19点については器種が判明し、さらに5点については、軟X撮影画像、あるいはその画像を活かしたクリーニングを実施し、実測調査した。本稿では、その成果について報告し、日本海沿岸地域における弥生時代鉄製品のなかに土井ヶ浜遺跡出土品の位置づけを試みたい。

鉄製品の特徴と評価

(1) 鉄鎌 (図1-1、写真1)

1957年に実施された5次調査で包含層より出土した。凹基三角形式鎌であり、基部をわずかに欠損しており、現存長6.9cm、幅3.0cm、厚み約0.3cmである。鋒はわずかにふくらをもち、側縁はほぼ平行であり、基部は深く抉り込まれている。先端から2cm離れて直径約2mmの孔が二個、横位に穿たれており、根挟みあるいは矢柄の緊縛孔と考えられる。日本海沿岸地域を含む本州の有孔無茎鉄鎌は単孔式が優勢であることから〔高尾2013〕、この鉄鎌が九州の例に近いことがわかる。また山陰地方において最大級の無茎鉄鎌である。

(2) 素環頭刀子 (図1-3、写真2)

1955年の3次調査で包含層より出土した。全長21.4cm、幅1.3～1.5cm、棟の厚み約0.4cmである。鋒の存否は現状観察と軟X線画像では判断できない。完形品であるならば、鋒は小さく短いかマス刃状であるが、折損後に再生された鋒とみることも可能であろう。刀身から茎端部まで同じ幅であり、関はみられない。環頭部は全長に対して占める比率が小さい。棟側の端部を細く、短く鍛延したのちに刃部側に折り曲げられている。その径は横に長く、縦に短く、わずかに角をもたせながら曲げられており、なめらかな弧をなしていない。これは日本列島内で生産されたことを示す証左の一

つとなろう。青谷上寺地遺跡から出土した舶載品を除けば、弥生時代に属する刀子としては日本海側で最長である。

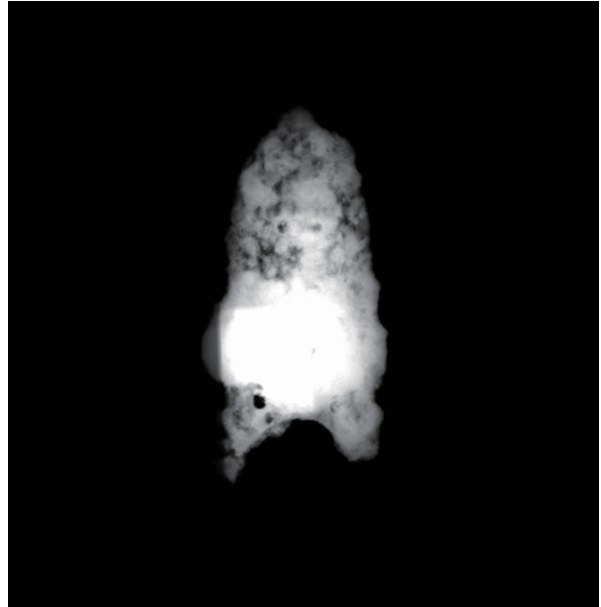


写真1. 鉄鏃

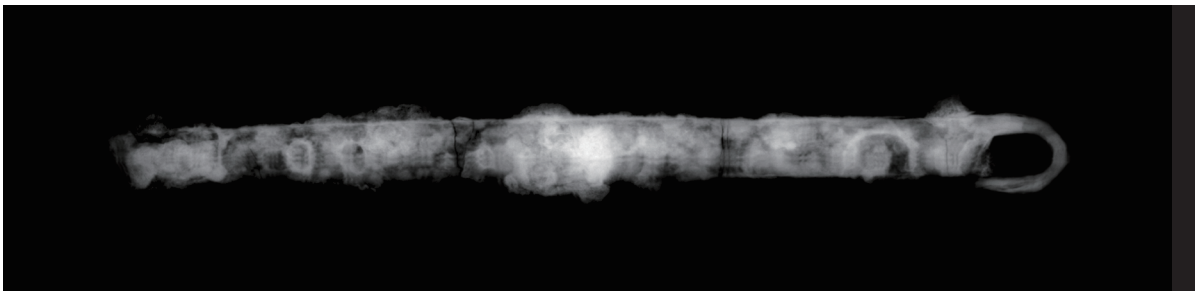


写真2. 素環頭刀子

(3) 袋状鉄斧 (図1-2、写真3)

1957年に実施された5次調査で包含層より出土した。現存長7.2cm、袋部幅3.2cm、最大幅3.4cmを測る鍛造袋状鉄斧である。袋部から刃部にかけて厚みを増しているが、刃部は層状剥離が顕著で大きく膨らんでおり、刃端は欠損している。袋部折り返し部の縁は丁寧に弧状に作られており、両縁は8mm離れている。

ソフトX線写真撮影により、袋端部が厚くなっていることを明らかにし、クリーニングした結果、袋部を形成する前に、その端部が折り曲げられていることが判明した。このような特徴を有する鉄斧は熊本県域を中心とする九州に分布し、九州を離れると東は日本海側で石川県、瀬戸内側では大阪にまで広がっている。九州を除くと、とくに日本海側に多く、鳥取県米子市妻木晩田遺跡や鳥取市青谷上寺地遺跡に集中域を形成している。本資料は、九州外部で発見された袋端部折曲げの袋状鉄斧としては最大級の資料であり、かつ九州に最も近い地域での発見例となり、北部九州と山陰における分布をつなげる重要な資料である。

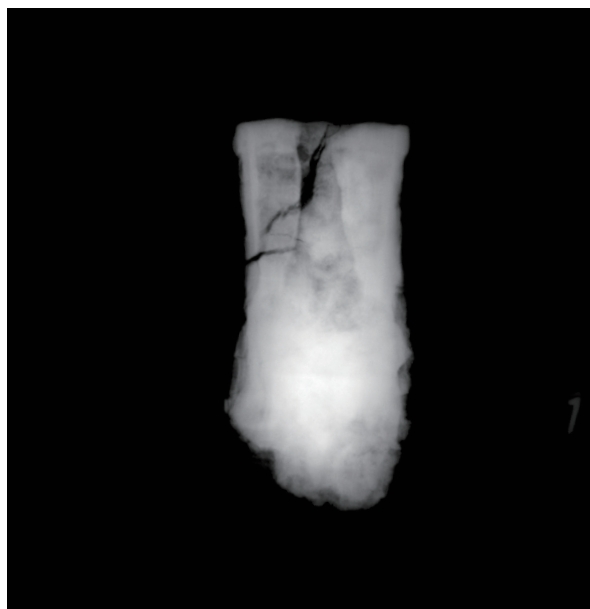


写真3. 袋状鉄斧

(4) 鉄鎌 (図1-4、写真4)

1957年の5次調査で包含層より出土した。切先部を欠損する曲刃鎌であり、現存長16.7cm、幅2.5cmを測る。基端部と棟のなす角度が鈍角になる例はしばしばみられるが、本資料がみせる角度は、北部九州や中九州にはみられても山陰側で類がない。折り曲げ部の長さは上端で約1cmで下端に向けて狭くなっており、摘鎌に多い折り曲げ方である。棟のラインはややうねっており、折り曲げ部の特徴と同様に特異な鎌である。

なお土井ヶ浜遺跡では本資料のほかに4点の鎌が出土しており、鉄器組成のなかで鎌の占める割合が大きい点も特異である。



写真4. 鉄鎌

(5) 大型棒状鉄器 (図1-5、写真5)

1957年の5次調査で包含層より出土した。棒状の大型鉄器であり、全長19.8cm、現存幅3.3cm、厚さは2.3～2.5cmを測る。朝鮮半島産の板状鉄斧のなかに、幅狭の棒状を呈する斧があり、棒状鉄斧と呼ばれる鉄器がある。しかしながら本資料は、鉄斧と評価できるような刃部は確認できない。また一方の側縁が著しく崩壊し欠損しているものの、本来、断面形は部分的に平行四辺形ないしは梯形を呈していたと考えられる。したがって棒状鉄斧とは断定できない。福岡県春日市赤井手遺跡や同小郡市三沢栗原遺跡で発見されている棒状鉄素材である可能性が極めて高い。当時の舶載鉄素材のなかで最も上級の鉄素材と推測される鉄器である〔村上2022〕。九州外部では初めての発見例である。



写真5. 大型棒状鉄器

(6) その他

これらのほかに鉄刀、刀子、方形板鋤鍬先、棒状鉄器などの破片がある。そのなかで注目されるのが、1次調査の1号人骨にともなって出土した薄い板状の鉄器である。縁は破面となっており、旧状はより広い鉄板であったと推測される。わずかに湾曲しており、表裏面に繊維痕をのこしている。厚みは1mmもなく、弥生時代の鉄器に類例をみない。

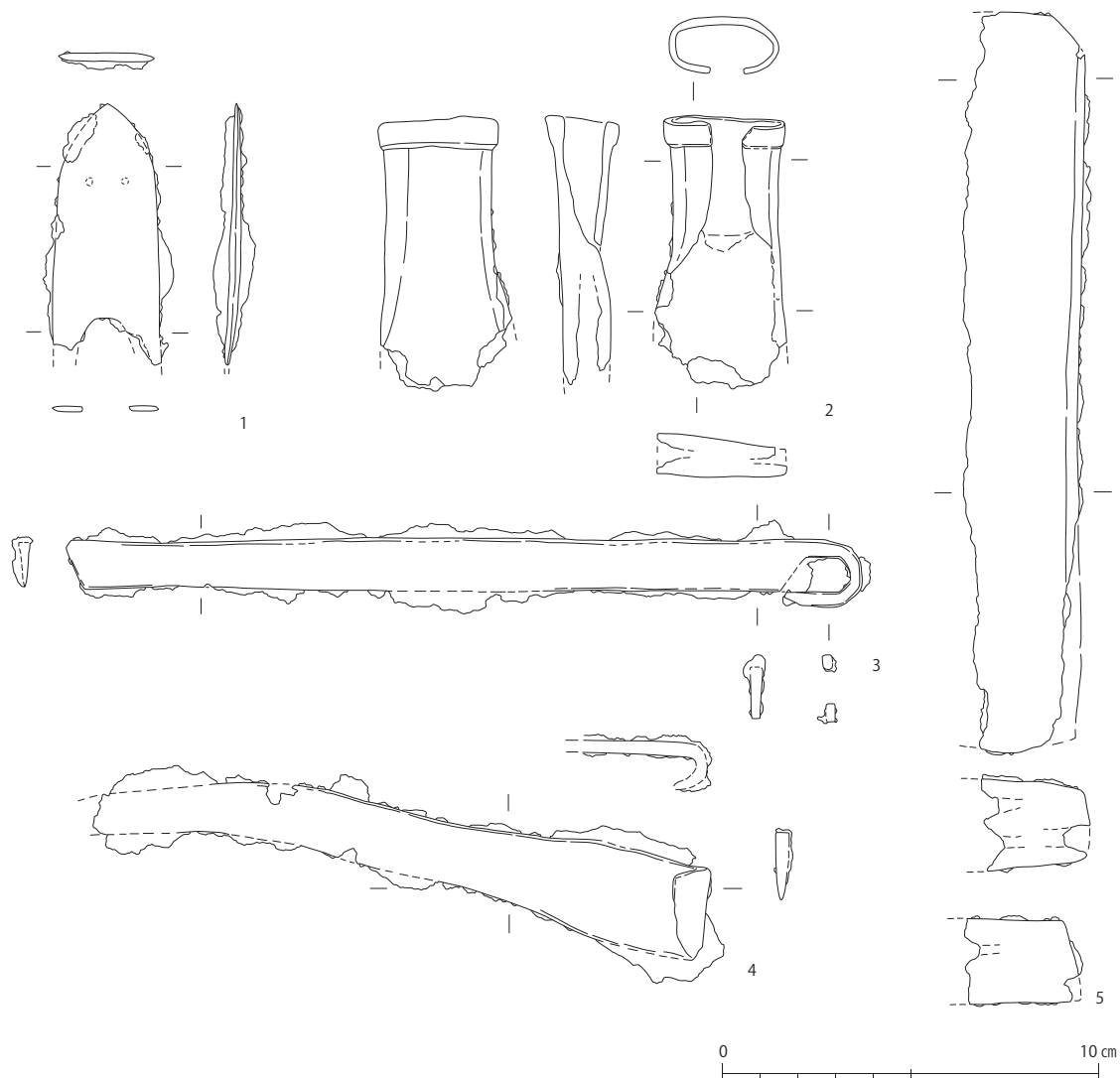


図1. 鉄製品実測図

まとめ

本稿で検討した土井ヶ浜遺跡出土鉄製品のすべてが山口県の響灘沿岸地域のみならず、山陰地方でも初めてとなる資料であることがわかった。近年、島根県や鳥取県では弥生時代の鉄製品の出土量が増加し、山陰における鉄器普及状況が次第に明らかになるなかで山口県域は空白地帯であった。その空白を埋める土井ヶ浜遺跡出土品は、北部九州の様相がとくに顕著であり、山陰地方における北部九州系鉄器分布のグラデーションを検討するうえで大変重要であることを認識させる。これは山陰地方における弥生時代鉄器論にとって新たな論点となろう。弥生文化研究における土井ヶ浜遺跡のもつ意義が人骨研究のみならず、山陰地方における鉄製品研究に対しても重要であることに気付かされた。

その歴史的な意義をさらに明らかにするためには、未調査の鉄製品に対しても適切な処置をしながら調査研究を進め、個々の資料の特徴を把握する必要があるだろう。そして今後、土井ヶ浜遺跡とその東方を繋ぐ資料が発見され、増加し、山陰沿岸地域の東西比較研究が進展することを期待したい。

本稿を草するにあたり、鄭宗鎬氏、馬赤嬰氏（愛媛大学大学院博士課程）の協力を得た。

《参考文献》

高尾浩司 2013 「弥生時代鉄鍬の着柄構造—鳥取県・松原田中1号墓の特異な副葬鉄鍬—」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編 2014 『土井ヶ浜遺跡 第1次調査～第12次発掘調査報告書』下関市文化財調査報告書35、下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

村上恭通 2022 「古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景」『纏向学の最前線』（『纏向学研究』第10号）纏向学研究センター

* 愛媛大学